

古田史学の会・東海

東海の古代

第162号 平成26(2014)年2月

会長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

常世の長鳴鳥

名古屋市 石田敬一

昨年は20年ぶりに伊勢神宮の式年遷宮がありました。鶏の夜明けを告げる鳴き声を模した、神職の「カケコー、カケコー、カケコー」で「遷御の儀」が始まりました。これは天照大神の天岩屋戸の故事に倣ったものです。

『古事記』から、その関連部分を抜き出します。

天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮人時、天衣織女見驚而、於梭衝陰上而死。【訓陰上云登壹】

故於是天照大御神見畏、開天石屋戸而、刺許母理【此三字以音】坐也。爾高天原皆暗、葦原中國悉闇。因此而常夜往。…<中略>…而、集常世長鳴鳥、令鳴而、取天安河之河上之天堅石、取天金山之鐵而、…<中略>…

故、天照大御神出坐之時、高天原及葦原中國、自得照明。

(岩波文庫『古事記』 P.223-224頁)

天照大御神、^い忌^{ほたや}みて服屋に坐し、神の御衣を織らしめたまひし時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墜し入る時に、天

の服織女見驚きて、梭で陰上を衝きて死す。

故に、ここに天照大御神、見畏みて、天石屋戸を開き、刺しこもり坐すなり。この時、高天原は皆暗くなり、葦原中国も悉く闇となる。これによりて常に夜となる。…しかしして、常世の長鳴鳥を集め鳴かせて、天安河の河上の天堅石を取りて、天金山の鉄を取りて、…故に、天照大御神が出で坐す時、高天原も葦原中国も、^{おのずか}自ら照りて明ける。

(読み下し、下線は石田による。以下同じ)

古田武彦氏が唱えられているとおり、天というのは、壱岐・対馬の海上領域である天国のことと考えられます。そこで、この天の「石屋戸」の話は、すべて海上領域の天国の話ということが前提となります。そして「石屋戸」は、その天国の中心にある対馬独特の石屋根倉庫であると古田氏は主張されています。対馬の石屋根倉庫は、屋根葺き部材に大きな平たい石を使い、穀物等を蓄えておくために古来から造られてきたものであり、起源は明かではありませんが、今も変わらず、穀物倉庫として利用され、「こや」と呼ばれています。

「石屋戸」について、岩波文庫の『古事記』(36頁註六)には

高天の原にある岩窟

と注釈されているように、定説では「石屋戸」は、石の洞窟と考えられていると思うのですが、

この定説は理解しにくいと思います。「石屋戸」を対馬にある石屋根倉庫と考えると、石屋根倉庫の戸は板戸ですから、「石屋戸」を細めに開くという天照大御神の行為が物理的に可能であると理解できます。また、石屋根倉庫は、現代でいえば屋根が石で造られた、いわば物置小屋であり納戸ですから、天照大御神が「見畏み」すなわち自分の言動を省みて、服屋から「石屋戸」に隠ることにした、そのつながりも石屋根倉庫であれば、よく理解できます。

弟である速須佐之男命が傍若無人に振る舞うことに対して咎めずにきた天照大神は、それを反省して、機織りの部屋である服屋から離れ、「石屋戸」である物置小屋に移動し、こもっているという状況だと思います。

服屋の屋根は、弟が穴を開けてしまったので、屋根が石で造られた石屋根倉庫に移るのは、たいへんよく理解できます。

こうした状況を前提に、太陽神である天照大御神が隠れてしまい、常に夜の状態になったので、天照大御神を出して明るくするために様々な工夫をします。その中に長鳴鳥の話があります。

『古事記』には「常世の長鳴鳥を集め鳴かせて」とありますから、この長鳴鳥のルーツを探れば、常世の場所が分かります。現在、日本で長鳴きする鶏は、高知県の東天紅鶏、新潟県の蜀丸鶏、秋田県の声良鶏ですが、最近の遺伝子研究の結果では、蜀丸鶏と声良鶏は軍鶏が起源であるとされ、さらに、東海大学の小宮山智義准教授により、日本鶏は、沖縄の軍鶏が起源であるとする研究成果を平成24年に発表されています。軍鶏は、シャム国、今のタイの国のことです。ただし、軍鶏は、江戸時代にタイから伝わったとされますので、『古事記』の時代よりもずいぶん新しく、直接「常世長鳴鳥」に該当するものではなさそうです。しかし、軍鶏もインドからミャンマー、マレー半島、タイ、中国の雲南省などの東南アジアに生息している赤色野鶏を家畜化したものだということのようで

すから、「常世長鳴鳥」も、こうした地域から伝わってきた鶏を長鳴きするように飼育・改良したのであらうと思われます。そこで、インドや東南アジアを常世の國とする説が生まれたのでしよう。

この『古事記』の記述で注意すべきこととして、「常世長鳴鳥」には、「天の」という修飾語がありませんから、壱岐・対馬等の天国の領域にいる鳥でないことは確かでしょう。山口県防府市の玉祖神社内には長鳴性の鶏である黒柏鶏の発祥地という石碑があり、日本原産の鶏がいたとされますが、紀元0年～1000年頃の遺跡とされる壱岐の原の辻遺跡や唐神貝塚で鶏の骨が出土しているのが考古学的には最古とされます。また、鳥形埴輪や鳥形木製器は三世紀に築造の纏向遺跡の出土が最古のようですので、縄文時代の日本に鶏がいたとする根拠はなく、弥生時代にインドや東南アジアで家畜化された鶏が、いろいろな経路で倭国へ輸入されたというのが現在のところの考古学の成果でしょう。

日本に伝わる直前に鶏の飼育をしていたころはどこになるのでしょうか。

中国では紀元前6千年頃の河北省と河南省から鶏の骨が出土しているようですが、史料上では、『史記』に「雞」や「野雞」の語句がありますので、紀元前の中国には、飼育された鶏と野生の鶏がいたことが文献で確かめられます。

『史記』から「雞」や「野雞」の記述についてそれぞれ一例を次に挙げます。

夜間漢軍四面皆楚歌、夾註[一]

【集解】¹ 應劭曰：「楚歌者，謂雞鳴歌也。漢已略得其地，故楚歌者多雞鳴時歌也。」

【正義】² 顏師古云：「楚人之歌也，猶言『吳謳』、『越吟』。若雞鳴為歌之名，於理則可，不得云『雞鳴時』也。高祖戚夫人楚舞，自為楚歌，豈亦雞鳴時乎？」按：顏說是也。

(史記／項羽本紀第七 P. 333 夾註一)

十九年，得陳寶。夾註[四]

【索隱】³ 按：漢書郊祀志云「文公獲若石云，於陳

*1 【集解】：史記集解(しきしつつかい)を表し、南朝宋の裴駰による『史記』の注釈書のこと。

*2 【正義】：史記正義(しきせいぎ)を表し、唐の張守節(ちようしゆせつ)による『史記』の注釈書のこと。

*3 【索隱】：史記索隱(しきさくいん)を表し、唐の司馬貞による『史記』の注釈書のこと。

倉北阪城祠之，其神來，若雄雉，其聲殷殷云，野雞夜鳴，以一牢祠之，號曰陳寶」。

(史記／秦本紀第五 P.179 夾註四)

また、2世紀から3世紀の記事になりますが、『魏志』韓伝の馬韓と州胡(濟州島)において、次のとおり家畜の記載があります。

無他珍寶。禽獸草木略與中國同。出大栗，大如梨。又出細尾雞，其尾皆長五尺餘。

(『三國志』魏書／烏丸鮮卑東夷傳／東夷／韓 P.849)

他に珍寶なし。鳥獸、草木はほぼ中国と同じ。梨の如くの大きさの大栗が出でる。また細尾鶏が出でる。その尾は長く、皆、五尺余り。

又有州胡在馬韓之西海中大島上，其人差短小，言語不與韓同，皆髡頭如鮮卑，但衣韋，好養牛及猪。其衣有上無下，略如裸勢。乘船往來市買中韓。

(『三國志』魏書／烏丸鮮卑東夷傳／東夷／韓 P.852)

又、州胡あり。馬韓之西海の中の大島の上に在り。その人の丈、やや短小。言語は韓と同じではなく、皆頭を鮮卑の如く剃る。但し衣は韋(なめし草)で、好んで牛及猪を養う。その衣は上は有るが下は無く、ほぼ裸勢の如く。船に乗り往來し、中国や韓で市買す。

馬韓には鶏、しかも飼育・改良された細尾鶏がいます。そして州胡(濟州島)では、牛や豚が飼われており中国や韓に船で往來し取引している様子がわかります。州胡の記事には鶏の飼育については記述されていませんが、牛豚の飼育を好んで行っているとともに、鶏を飼育していた中国や韓と往來していることから、好んで飼育してはいなくとも、鶏を飼っている可能性はあると思います。

これらの記事から、輸入ルートの一つとして、倭国へはおおよそ朝鮮半島や濟州島において家畜化された鶏が入ってきたと考えられるでしょう。

一方、『魏志』倭人伝には「其地無牛馬豹羊鵠」との記述があり、鶏についての記述はありません。

「常世の長鳴鳥を集め鳴かせて」の短い記述のみで常世の具体的な場所を特定することはできませんが、以上のことから「常世長鳴鳥」は常世を原産とする野鶏を、朝鮮半島や濟州島で長鳴きに飼育し、その鶏を倭国が輸入したのではないかと思われます。しかしながら、常世の場所を特定する記述はありませんので、当然のことですが常世の具体的な場所は不明です。

ただ、「東海の古代」161号(2014年1月)における「非時香菓」の考察で示したとおり、『日本書紀』の編者は、神仙思想をもとに常世を崑崙と考えていたと思います。

ところで、天の岩屋戸から天照大神を出そうとするため、鶏の長鳴きにより朝を演出し、高天原、葦原中国がともに光り輝いたとする「常世長鳴鳥」と同じような話は、東南アジアの民話などにあります。

濟州観光公社のホームページの「濟州の誕生説話」には、次のとおり濟州島の神話が紹介されています。

長い間世の中はただの真っ暗闇でした。暗闇と混沌に包まれた暗黒の天地に開闢の機運が動き始めました。

…<中略>…

ある瞬間、天皇鶏が首をあげ、地皇鶏が羽ばたき、人皇鶏が尾を振って大きく鳴くと、東方から夜が明け始めました。この時、天から天地王が二つの日と二つの月を送り出すや、世の中が明るくなり、天地がぱっと開かれたのです。

(www.ijto.or.kr/japanese/?cid=16)

中国史料による日本古代史(1)

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

中国史料から、日本に関する記事を抜き出して年表(別表1「中国史料による日本古代史年表」)を作成したので報告する。

年表は、史料を「二十四史書（『漢書』～『旧唐書』及び『宋史』）」と「二十四史書以外の史料」とに分け、各々年表を作成した。

古代は、持統・文武天皇までとした。

2 作成

(1) 史料

次の史料により倭国（倭、倭人、倭国、唐時代の一部では日本。）について作成した。

① 二十四史書

- ・台湾商務館版百衲本二十四史
- ・中華書局版二十四史

なお、中国南北朝時代の史書の内、『陳書』、『魏書』、『北齊書』及び『周書』は日本に関する記事が記載されていない。

② 二十四史書以外の史料

- ・『通典』
- ・『唐会要』
- ・『冊府元龜』
- ・『論衡』（倭人について記述がなされているので、掲載した。）

③ 『太平御覧』は二十四史書のうち『後漢書』、『三国志』、『南史』、『北史』および『唐書』からの引用と記述されているので、年表に掲載しなかった。

なお、二十四史書の引用と記述しながら、引用史書と異なる記事がある。その状況は次のとおりである。

a 倭

- ・後漢書曰 倭在韓東南大海中 依山島為居 凡百餘國 武帝滅朝鮮 使驛通於漢者三十許國 倭王居邪馬臺國 樂浪郡徼去其國萬二千里 其地大較在會稽東冶 與朱崖・儋耳相近
(中華書局版『太平御覧』3464頁)

表題は「倭国」ではなく、「倭」である。また、この文章のみ「倭」で、それ以後の文章では「倭」としている。

・魏志曰……

- ・景初三年 公孫淵死 倭女王遣大夫難升米等言帶方郡 求詣天子朝見
(中華書局版『太平御覧』3464頁)

表1 中国史料一覧

書名	著者	時代	成立年
漢書	班固	後漢	82年頃
後漢書	范曄	南宋	445年
三国志	陳寿	晋	297年以前
晋書	房玄齡 他	唐	648年
宋書	沈約	梁	紀伝：488年 志：502年以降
南齊書	瀟子顯	梁	537年以前
梁書	姚思廉 他	唐	636年
隋書	長孫無忌	唐	紀伝：636年 志：656年
南史	李延寿 他	唐	659年
北史	李延寿 他	唐	659年
旧唐書	劉昫	後晋	945年
新唐書	欧陽修 他	宋	1060年
宋史	脱脱 他	元	1345年
論衡	王充	後漢	1世紀末頃
通典	杜佑	唐	801年
唐会要	王溥	北宋	961年
太平御覧	李昉 等	北宋	977～983年
冊府元龜	王欽若 他	北宋	1013年

※ウィキペディアにより作成した。

『三国志』では景初二年である。

b 日本国

・唐書日……

(中華書局版『太平御覧』3466頁)

『唐書』は『旧唐書』からの引用である。

④ 中国史料の著者・成立時期等は表1「中国史料一覧」のとおりである。

また、中国史料から引用した記事の史料目次は別表2「掲載した記事の史料目次一覧」とおりである。

⑤ 倭国について作成したが、倭国以外の国々(琉球國、蝦夷國、扶桑國等)についても別途作成する。

(2) 日本記事以外の記事

日本に多大な影響を与えたと思われる事項の記事を掲載した。その事項は、表2「日本記事以外の追加事項」のとおりである。

表2 日本記事以外の追加事項

事 項		西 曆	皇 帝	
曆	改曆	景初曆	237～	明帝(魏)
		元嘉曆	445～	文帝(宋)
		(儀風曆) 麟德曆	665～	高宗(唐)
夏正 ^{*1} 以外の 曆	殷正	237～239	明帝(魏)	
	周正	690～700	武則皇后(周)	
称号	皇帝→天皇	674～686	高宗(唐)	
百濟	滅亡 (百濟王捕虜)	660	高宗(唐)	
	白村江の戦い	663	高宗(唐)	

*1 夏正：現在使用している曆。1月を正月としている。

殷正：現在の12月を正月とし、1ヶ月繰り上げている曆

周正：現在の11月を正月とし、2ヶ月繰り上げている曆

*2 魏書：『三国志』以前に王沈が書いた三国時代・魏の歴史書。現存せず、『三国志』の注釈の中に断片的に残されているだけである。

(3) その他

① 年表は、百衲本二十四史書及び二十四史以外の史料により作成したが、記事の内容が確認出来るよう中華書局版二十四史書の掲載頁を記載した。

また、二十四史書以外の史料のうち、『通典』・『唐会要』・『冊府元龜』は中華書局発行本、『論衡』は新釈漢文大系本での掲載頁である。

② 百衲本二十四史書には句読点等が記述されていないが、中華書局版二十四史書を参考にして、適宜、空白等を用いて記載した。

③ 『晋書』では

- ・東夷○国朝献、来献、朝貢
- ・東夷○国内附
- ・東夷○国帰化

など、具体的な国名が記述されていないが、東夷に倭国が含まれている可能性があるので、掲載した。

④ 倭国に関する帝紀及び列伝(倭国、倭、倭人、倭国、日本)の外に、韓伝・琉球国伝等に倭国についての記述があれば掲載し、引用列伝を明示した。

⑤ 『後漢書』烏桓鮮卑列伝(鮮卑)の

光和元年 冬

種衆日多 田畜射獵不足給食 檀石槐乃自徇 行見烏侯秦水廣從數百里 水停不流 反其中有魚 不能得之 聞倭人善網捕 於是東擊倭人國 得千餘家 徙置秦水上 令捕魚以助糧食

(中華書局版『後漢書』2994頁)

では、倭人として記述されているが、次の理由により掲載しなかった。

・『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷(鮮卑)での注書き

魏書^{*2} 曰「……鮮卑種衆日多 田畜射獵 不足給食 後檀石槐乃案行烏秦水 廣袤數百里 不流中有魚 而不能得 聞汗人善捕魚 於檀石槐東擊汗國 得千餘家 徙置烏侯秦水上 使捕魚以助糧……」

(中華書局版『三国志』838頁)

では、「汗」としている。また、『後漢書』は『三国志』成立以後に作成されているので、『後漢書』の著者范曄は「汗」を「倭」に改めたと思われる。

・『冊府元龜』外臣部（強盛）では
靈帝 光如初
鮮卑種衆日多 田畜射獵不足給食 檀石槐乃自循 行見烏集鳳水廣數百里 水停不流 其中有魚 不能得之 聞倭人善網捕 於是東擊倭人國 得千餘家 徙置秦水上 令捕魚以助糧食
 （中華書局版『冊府元龜』11731頁）

と、「倭人」ではなく「倭人」としている。

・『三國志集解』¹⁾ 魏書 烏丸鮮卑東夷（鮮卑）の著者盧弼は、注書きで
淳不流中有魚而不能得聞汗人善捕名魚於是東擊汗國 范書汗作倭 惠棟曰汗當作汗與倭同音 魏志云倭人好捕魚腹水無淺深皆沈沒取之 丁謙曰汗人國指朝鮮南境馬韓辰韓弁韓等部范氏改爲倭人謬甚倭今日本遠隔重洋石槐雖強非所能至安得伐之弼 按丁氏謂汗人非倭人誠是然指汗國爲朝鮮南境亦無據
 （中華書局版『三國志集解』685頁）

と、「倭人」は誤りであるとしている。

⑥ 『三國史記』百濟本記には、隋の裴世清が百濟の南路²⁾ を通って倭国に行ったとの記事

が記述されていたので、掲載した。

⑦ 『新唐書』・『宋史』に神及び天皇の系譜が記述されているので、別表3「中国二十四史書に掲載されている『神・天皇』の系譜を作成した。

また、『宋史』列伝外国（日本国）に記述している「王年代記」で、神々の居住地は「筑紫日向宮」としている。

福岡市内を貫流している室見川の支流に日向川がある。日向川（右岸）と室見川（左岸）に挟まれた地域に「吉武高木遺跡」あり、この遺跡が「筑紫日向宮」か？

また、近くに「日向峠」があり、「日向山³⁾」がある。

3 記事の異同等

二十四史書から年表を作成して、次のような事項が判明した。

(1) 中国への遣使状況

a 『北史』列伝（四夷・倭国）

江左歴 晉・宋・齊・梁 朝聘不絶 及陳平 至開皇二十 ……

（中華書局版『北史』3135・3136頁）

表3 『旧唐書』・『新唐書』における同内容記事の年号異同

事項	旧唐書	新唐書
周正の改廃	<u>載初元年</u> 春正月 …… 依 周制 建子月為正月 改永昌元年十一月為載初元年正月 十二月為臘月 改舊正月為一月 大酺三日	<u>天授元年</u> 正月庚辰 大赦 改元曰載初 以十一月為正月 十二月為臘月 來歲正月為一月
	<u>聖曆三年</u> 冬十月甲寅 復舊正朔 改一月為正月 仍以為歲首 正月依舊為十一月 大赦天下	<u>久視元年</u> 十月甲寅 復唐正月 大赦
称号を「天皇」に改称	<u>咸亨五年</u> 秋八月壬辰 皇帝稱 天皇 皇后稱天后 改鹹亨五年為上元元年	<u>上元元年</u> 八月壬辰 皇帝稱天皇 皇后稱天后

*1 『三國志集解』：盧弼（中国）著、古籍出版社、1957年。復刻版：中華書局、1982年12月

*2 『三國史記』百濟本記第五（武王）九年 春三月 遣使入隋朝貢 隋文林郎裴世清奉使倭國 徑我國南路

*3 日向山：古田武彦著『盗まれた神話』復刻版156～159頁（ミネルヴァ書房、2010年3月）参照

表 4

中国史料における同内容記事の日付異同

記事内容	史	書	記	事
卑彌呼の魏への遣使	三国志・魏書	列伝	<u>景初二年六月</u> 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都 <u>其年十二月</u> 詔書報倭女王曰「制詔親魏倭王卑彌呼……」	
	晋書	列伝	<u>宣帝之平公孫氏也</u> 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絶 ※宣帝（司馬懿→晋の初代皇帝）	
	梁書	列伝	<u>景初三年</u> 公孫文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金印紫綬	
	北史	列伝	<u>景初五年</u> 公孫文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金印紫綬	
	通典	邊防	<u>景初二年</u> 司馬宣王之平公孫氏也 倭女王始遣大夫詣京都貢獻 魏以為親魏倭王 假金印紫綬	
	太平御覽	四夷部	魏志曰…… <u>景初三年</u> 公孫淵死 倭女王遣大夫難升米等言帶方郡 求詣天子朝見 ※「倭」として記述	
	冊府元龜 (外臣部)	朝貢	<u>景初二年六月</u> 倭王遣大夫難升米等詣帶方郡 求請天子朝獻	
		封冊	<u>景初二年六月</u> 倭王遣大夫難升米等詣帶方郡 求請天子朝獻 <u>其年十二月</u> 詔書報倭女王曰「制詔親魏倭王卑彌呼……」	
褒異		<u>景初二年</u> 倭女王遣大夫難升米牛利等朝獻		
栗田真人の來貢方物	旧唐書	列伝	<u>長安三年</u> 其大臣朝臣真人 來貢方物	
	新唐書	列伝	<u>長安元年</u> 其王文武立 改元曰太寶 遣朝臣真人栗田 貢方物	
	宋史	列伝	<u>長安二年</u> 其朝臣真人 貢方物 (王年代記) 次文武天皇 大寶三年 當長安元年 遣栗田真人 入唐求書籍 律師道慈 求經	
	通典	邊防	<u>長安二年</u> 遣其大臣朝臣真人 貢方物	
	唐会要	日本国	<u>長安三年</u> 遣其大臣朝臣真人來朝 貢方物	
	太平御覽	四夷部	唐書曰…… <u>長安三年</u> 其大臣朝臣真人來貢方物	
	冊府元龜 (外臣部)	朝貢	<u>長安三年十月</u> 日本国遣使 其大臣朝臣貢 (※真) 人 貢方物	

- b 『宋史』列伝（外国七・日本国）
 自後漢始朝貢 曆魏・晉・宋・隋皆來貢
 唐永徽・顯慶・長安・開元・天寶・上元・貞元・元和
 ・開成中 並遣使入朝
 （中華書局版『宋史』14131頁）

これにより倭国（日本国）は後漢・魏・南朝各国・隋・唐と中国に遣使している。

『日本書紀』では、「魏」及び「唐」（通説では「隋」を含む。）のみ遣使している。

これにより、『日本書紀』では中国南北朝時代の南朝について記述されていないことが明確に判明した。

(2) 『旧唐書』・『新唐書』における年号の記述方法。

年号の記述方法が次のように異なり、年号の異同が存在するので、留意する必要がある。

- ・『旧唐書』：改元を行ったその時点で、改元した年号を記述している。
- ・『新唐書』：改元を行った歳の正月に遡って改元した年号を記述している。なお、同一年内に複数の改元を行った場合には、最も新しい改元した年号で記述している。

特に、則天皇后は頻繁に改元している。その改元状況は、別表4「則天皇后紀における改元状況」を参照されたい。

具体的には、表3「『旧唐書』・『新唐書』における同内容記事の年号異同」のとおりである。

(3) 記事の異同

同内容の記事が、史料によって時期が異なる。その状況は、表4「中国史料における同内容記事の日付異同」のとおりである。

(4) 語句の異同

次の語句に異同がある。そして、記述されている史料は、表5「中国史料における語句の異同」のとおりである。

- ・「邪馬壹国」と「邪馬臺国」
- ・「俾彌呼」と「卑彌呼」

- ・「壹與」と「臺與」
 - ・「倭国」と「倭国」
 - ・「多利思北孤」と「多利思比孤」
- また、この語句を強調するため、年表上の語句に下線を引いた。

なお、中華書局版での「校勘記」で、「倭」を「倭」、「多利思北孤」を「多利思比孤」と校訂し、その理由を次のように記述している。

- a 『隋書』百濟伝
 其人雜有新羅高麗倭等：「倭」原作「倭」、按古從「委」和從「妥」的字、有時可以通用。如「倭」或作「倭」、「倭」或作「倭」。「倭」應是「倭」字的別體。本書煬帝紀上作「倭」。本卷和地他處作「倭」者、今一律改爲「倭」。
 （中華書局版『隋書』1829頁）

- b 『隋書』倭国伝
 多利思比孤：「比」原作「北」、據北史倭国傳、通典一八五、通鑑大業四年改。下同。
 （中華書局版『隋書』1830頁）

(5) 記事の疑義

『新唐書』列伝の内、天皇系譜の記事に疑義がある。

- ① 子天智立 明年使者與蝦蟇人偕朝
 （『新唐書』6208頁）
- ・ 明年は、天智称制2年（663年）、又は即位2年（669年）である。
 - ・ 『通典』、『唐会要』、『冊府元龜』では顯慶4年（659年、齊明5年）としている。
 - ・ 『日本書紀』では齊明5年の記事である。
 - ・ 故に、「天智立」の前の記事である。
- ② 子天武立 死總持立 咸亨元年 遣使賀平高麗
 （『新唐書』6208頁）
- ・ 總持（持統）は朱鳥元年（686年）に称制を行い、持統4年（690年）に即位した。
 - ・ 咸亨元年は670年である。
 - ・ 唐が高句麗を征服^{*1}したのは総章元（668）

*1 『新唐書』（高宗紀）：（総章元年）九月癸巳，李勣敗高麗王高藏，執之。十二月丁巳，俘高藏以獻。
 （中華書局版『新唐書』67頁）

年9月である。すなわち天智7年である。 「史料による記事の異同」及び「語句の異同」
 ・故に、「**子天智立**」の後の記事である。 については後述する。

表5
 中国史料における語句の異同

邪馬壹国		邪馬臺国			
三国志・魏書	烏丸鮮卑東夷伝 (倭人)	後漢書	東夷列伝 (倭)	隋書	東夷 (倭国)
		梁書	列伝・東夷 (倭)	北史	列伝・倭国

倭 彌 呼		卑 彌 呼			
三国志・魏書	三少帝紀(斎王)	後漢書	東夷列伝 (倭)	隋書	列伝・東夷(倭国)
	冊府元龜 外臣部 (朝貢)	三国志・魏書	烏丸鮮卑東夷伝 (倭人)	北史	列伝・倭国
晋書			列伝・東夷 (倭人)	通典	邊防
梁書		列伝・東夷 (倭)	冊府元龜	外臣部 (封冊、繼襲)	

壹 與 (一 與)		臺 與			
三国志・魏書	烏丸鮮卑東夷伝 (倭人)	梁書	列伝・東夷 (倭)	冊府元龜	外臣部 (繼襲)
	冊府元龜 外臣部 (朝貢)	北史	列伝・倭国		

倭		倭			
隋書	志・音楽 列伝・東夷 (倭国、百濟、琉球国)	後漢書	光武帝紀・孝安帝紀 東夷列伝 (倭、韓)	南史	宋本紀・梁本紀 列伝・東夷(百濟、倭国)
		晋書	列伝・東夷 (倭人)	北史	隋本紀
北史	列伝・倭国 列伝・百濟	宋書	列伝・夷蛮 (倭国)	旧唐書	列伝・東夷 (倭国、日本)
		南齊書	列伝・東南夷(倭国)	新唐書	列伝・東夷 (日本、百濟)
		梁書	本紀(武帝) 列伝・東夷 (倭、百濟)	通典	邊防
				冊府元龜	外臣部 (封冊)
隋書	帝紀・煬帝				

多利思北孤		多利思比孤			
隋書	列伝・東夷(倭国)	北史	列伝・倭国	宋史	列伝・外国(日本国)
		新唐書	列伝・東夷 (日本)	冊府元龜	外臣部 (繼襲)

前号に引き続き掲載します。

○159号（平成25年11月）

1 はじめに

2 咸亨元年(670年)の遣唐使

○161号（平成26年1月）

3 白雉4年の遣唐使

九州王朝の遣唐使(その3)

名古屋市 佐藤章司

4 白雉5年の遣唐使

1) 『日本書紀』から

①白雉五年(654年)二月条

たかむこのふびとげんり
大唐に遣わす押使大錦上高向史玄理・大使小錦下河辺臣麻呂・副使大山下薬師恵日・判官大乙上書直麻呂・宮首阿弥陀・小乙上岡君宜・置始連大伯・小乙下中臣間人連老・田辺史鳥らが二船に分乗した。数ヶ月かけて新羅道こうそうを辿り萊州に着いた。ようやく長安京に至って高宗帝に拝謁した。東宮監門かくじょうきよ郭文举は、詳しく日本国【原文：日本国】の地理と国の初めの神の名などを尋ねた。皆、問たかむこのふびとげんりに対して答えた。押使高向史玄理は大唐の地で死んだ。（講談社学術文庫『日本書紀』下、195頁）

②齐明天皇元年(655年)八月一日条

河辺臣麻呂らが大唐から帰った。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、198頁）

と記述されている。

2) 中国史料からの検討

これを中国側の史料から検討すると

A: 『新唐書』列伝一東夷・日本

永徽初 其王孝徳即位 改元白雉 獻虎魄大如斗・瑠璃若五升器

（中華書局版『新唐書』6208頁）

永徽初、その王孝徳が即位し、改元して白雉はいけいという。一斗升こぼくのような大きさの琥珀五升器めのおのような瑠璃を献上した。

B: 『旧唐書』高宗紀

永徽五年(654年)十二月癸丑 倭国献琥珀・瑠璃 琥珀大如斗 瑠璃大如五斗器

（中華書局版『旧唐書』73頁）

永徽五年(654年)十二月癸丑きちゆう、倭国は琥珀・瑠璃を献上した。琥珀の大きさは一斗升の如し。瑠璃の大きさは五升器の如し。

C: 『唐会要』倭国

永徽五年(654年)十二月 遣使献琥珀・瑠璃 琥珀大如斗 瑠璃大如五斗器

（中華書局版『唐会要』1770頁）

永徽五年(654年)十二月、使者を遣わして琥珀・瑠璃を献した。……

D: 『冊府元龜』外臣部（朝貢）

（永徽五年）十二月 倭国遣使 献琥珀・瑠璃 琥珀大如斗 瑠璃大如五斗器

（中華書局版『冊府元龜』11401頁）

永徽五年十二月、倭国使者を遣わして琥珀・瑠璃を献した。……

『唐会要』は倭国伝と日本伝を書き分けられ、この記事は倭国に分類され、その献上は十二月のことと記されている。この倭国は筑紫に都する九州王朝である。

3) 「日本国」の国号

1) と2) の記事から、白雉五年(654年)二月に倭国を出発し、十カ月後の永徽五年(654年)十二月に長安に着き琥珀瑠璃を献上した遣唐使ということになる。

上のA、「永徽初(650～)の孝徳天皇の即位と琥珀・瑠璃の献上」の記事を『日本書紀』から検討すると、孝徳天皇の統治期間は大化・白雉(645-654年)であって、孝徳天皇の即位は大化であり、『新唐書』の白雉とは相違している。

また、白雉五年の孝徳天皇による「琥珀・瑠璃」献上の記事は、『日本書紀』には記述されていない。この琥珀・瑠璃の献上とは別に、倭国側は日本国への国号変更の説明に対して、日本国の由来や地理・神の名等を問われて、「皆、問に対して答えた。」と記載され、郭文举かくじょうきよの持っていた倭国の理解と高向史玄理たかむこのふびとの述べる倭国の歴史・由来等がすべて一致

していた、ということだろう。

実質は倭国＝日本国である。倭国側は日本国への国号変更の説明に対して、唐側の歴史書の『旧唐書』・『新唐書』類には「瑠璃・琥珀」献上記事のみで、倭国から日本国への国号変更記事が一切ないのはどうしたことか、疑問が残る。ただ、その残片と思われるものを下に記す。

この日本国を『旧唐書』日本伝では国名の由来を倭国の別種と記し

- ①その国、日辺にあるを以て、故に日本をもつて名となす。
- ②あるいは倭国自らその名を雅ならざるをにく悪み、改めて日本となす。
- ③あるいは日本は旧小国、倭国の地を併せたり」という。

と、複数の由来を記している。特に②の「倭国自らその名を雅ならざるを悪み、改めて日本となす」は注目すべきであろう。すなわち、白雉五年（永徽五年）に倭国側から日本国国号変更をした理由を説明し、唐側はこれを了承せず従来通り倭国のままとした、という以外にない。これは唐土で押使の高向史玄理の突然の死が響いたこともあると思うが「日本＝日の本」、であり『隋書』倭国伝の「日の出処」のものと同形を変えた再現であり、これを嫌ったからであろう。倭国側はこの後、東アジアの中で倭国の国名を離れ、独自に日本国と自称していくこととなる。

「倭が雅でないので悪む」という認識は孝徳紀の重臣である高向史玄理が学生として唐で20年間学んだ中から生まれた認識であろう。

『日本書紀』舒明天皇十二年（640）冬十月十一日、

大唐の学問僧清安、生学生高向玄理が新羅を經由して帰国した。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、132頁）

と、記述されているとおり、20年間（＝640年－620年）の留学である。この20年間の勉学の結果「倭」が雅でないことを知った。そして、当時の最高権力者である倭国の天子すなわち孝徳天皇に国名変更を進言し

た。これが白雉五年（654年）遣唐使の押使（全権委任大使か？）任命であろう。『日本紀』・『日本旧記』・『日本世記』などの「日本」の名を持つ史書があることを考えると、九州王朝滅亡（701年）以前に「倭国が日本国へ国号変更をしたこととなろう。中国を中心とした東アジア視点での「倭国や日本国」は国内的視点に立てば、すなわち九州王朝である。

4) 白村江と日本国

天智天皇二年（663年）白村江の戦いは唐の水軍との戦であるが、倭国ではなくて、以下に示すように『日本書紀』では日本国となっている。これは白雉五年（654年）「倭国から日本国」へ国号を変更した為で、倭国ではなく日本国と記述されている理由である。九州王朝が自らが「日本」と名のつたのである。

以下『日本書紀』を概略記載する。

天智天皇二年（663年）

- ①秋八月十三日、新羅は百濟王が自分の良将を斬ったことを知り、直ちに攻め入ってまず州柔を取ろうとした。ここで百濟王は敵の計画を知って諸将に告げて「大日本国の救援將軍廬原君臣が兵士一万余を率いて今に海を越えてやってくる。…私は自分で出かけて白村江でお迎えしよう」といった。
- ②二十七日、日本の先着の水軍と大唐の水軍が合戦した。日本軍は負けて退いた。…
- ③二十八日、日本の諸将と百濟王とは、その時の戦況などを良く見極めないで、共に語って「われらが先を争って攻めれば、…」といった。さらに日本軍で隊伍の乱れた中軍の兵を率い、進んで大唐軍の堅陣の軍を攻めた。たちまちに日本軍は破れた。…この時、百濟王豊璋は、数人と船に乗り高麗に逃げた。
- ④九月七日、州柔城は唐に降伏した。このとき国人は語り合つて「州柔城は落ちた。…日本^{つぬ}の將軍達に会い、今後の処置を相談しよう」といった。

⑤二十四日、日本の水軍と佐平余自信・率木素貴子 … と、一般人民は亘礼城に着いた。

(日本古典文学大系『日本書紀』下、323頁)

⑥翌日船を出してはじめて日本に向かった。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、223・224頁)

①～⑥が白村江の戦いのなかで「日本」の記述の拾い出しである。

白雉五年(654)の日本国国号制定から9年後の663年に、倭国(日本国)や百済では日本と呼んでいたことがわかる。

上の記事の元史料は百済と倭国(日本国)の其其の史料から合作したのであろう。

5)『三国史記』新羅本紀から

文武王十年(670年)十二月条

倭国、更めて日本と号す。自ら言う。日出づる所に近し。以て名と為すと。

(岩波文庫『三国史記倭人伝、他六編』49頁)

上の文は日本国の国号制定は「670年説」であるが、これは『新唐書』日本伝の次に示す咸亨元年(670年)使を遣わして高麗を平ぐるを賀す。後、稍やく夏音に習い、倭の名を悪み、更めて日本と号す。……

(中華書局版『新唐書』6208頁)

の誤読の結果である。先に記した「3)「日本国」の国号」の中で述べた「倭が雅でないので悪む」という認識は孝徳紀の重臣である高向史玄理が学生として唐で20年間学んだ中から生まれた認識であって、白雉五年(654年)が「日本国」国号の始まりである。

6)九州王朝の冠位と人物

白雉五年(654年)二月の遣唐使は高向史玄理(注1)と薬師惠日(注2)を含めては九州王朝側の人間だ、と認識を得たので下に記す。

又、この使節団の冠位

①押使大錦上高向史玄理は、或本では

或本云 夏五月遣大唐押使大花下高向玄理

(日本古典文学大系『日本書紀』下、321頁)

②判官大乙上書直麻呂・宮首阿弥陀、或本では

或本云 判官小山下書直麻呂

と、本文に割注が付いていて、この使節団の冠位の違いを指摘している。本来は白雉四年の遣唐使と同じ、大化5年の「冠位19階」である。

(注1)高向史(漢人)玄理

『日本書紀』推古十六年(608)遣隋使、小野妹子を大使、吉士雄成を小使として裴世清を送るメンバの中に、学生と学問僧8人の内学生高向漢人玄理がいる。この記事の本来は遣隋使ではなく、推古二十八年(620年)の遣唐使のこと。この時に唐に渡り、舒明十二年(640年)冬十月十一日、大唐の学問僧清安と共に学生として派遣された大唐から新羅経由で帰国する。

白雉五年(654年)の遣唐使のさい、押使として派遣されが、唐で客死する。この時の年齢を推定すると推古二十八年(620年)の時、20歳で学生として唐に派遣されたと仮定すると白雉五年の押使任命時には54歳となり、実際的ではなかろうか?

又、『常陸国風土記』、行方郡から

古老曰へらく、

難波の長柄の豊前の大宮馭宇しめしし天皇の世、癸丑の年(653年)に、茨城の国造小乙下壬生連磨、那珂の国造大建壬生直夫子等、惣領高向の大夫・中臣幡織田の大夫等に請ひて、茨城の地の八里、那珂の地七理合わせて七百余戸を割きて、別きて郡家を置けり。

(講談社学術文庫『常陸国風土記』56頁)

この記述を検討すると

①小乙下・大建は九州王朝の冠位制度

②茨城8里+那珂7里=15里

700余戸÷15里=50戸/里

②の50戸/里は『日本書紀』白雉三年(652年)四月条

この月に戸籍を作った。50戸を里とし、里ごとに長一人を置いた。戸主は家長をあてる。5戸をもって保とする。中の一人を長とし、検察の役目をする

(講談社学術文庫『日本書紀』下、192頁)

と、あって①②とも九州王朝と常陸国の繋がり
の深さを感じさせる。その九州王朝の中核を担
った人物が高向漢人史玄理である。

(注2) 薬師恵日

舒明二年(630年)秋八月五日、大仁犬上
君三田耜みたすきと共に、大唐に派遣される。

これとは別に『旧唐書』倭国伝に記す

貞観五年(631年)に方物を献ず

(中華書局版『旧唐書』5340頁)

と遣唐使が派遣されている。

『日本書紀』では、舒明四年(632年)秋
八月、大唐使者「高表仁¹」と共に三田耜が帰
国するが、恵日の帰国は記述されていなく、帰
国時期は不明である。高表仁は来倭している。

また、白雉五年(654年)二月の遣唐使派
遣のさい、副使として派遣される。九州王朝の
遣唐使である。

なお、「舒明二年(630年)の遣唐使」は
別に論じる。

前号に引き続いて掲載します。

- 1 発端
- 2 式内社
- 3 尾張国式内社

繊維街の源流を求めて(その2)

名古屋市 加藤勝美

4 ひしめく神社

尾張国は古代から神社密集地域の一つです
が、とりわけ熱田神宮周辺、木曾川沿岸地域な
どに密集しています。中でも今回考察の対象に
している旧山田郡の一部、すなわち名古屋市北

区黒川一帯は目につきます。前回述べたように、
わずか3キロ四方、面積にして9平方キロの中
に5つの式内社が存在しているのです。尾張国
の面積はざっと1700平方キロあったと目さ
れていて、この中に121社の式内社がありま
した。つまり平均すれば14平方キロに1社し
かなかつたわけです。それが、9平方キロの中
に5つもあったのです。こういう、神社の密集
性という観点から考察を加えた論文に出会った
ことはありませんが、大変興味深い観点だと思
われてなりません。というのも神社密集地域に
は災害多発性や人口密集性を反映している可能
性が高いからです。

が、そうした観点からの考察は興味のある論
者に委ねることにしましょう。もしも機会があ
れば、私自身が他日を期すこととしましょう。
ここでは先を急ぐため織物関係神社に集中する
ことにします。いずれにしても、9平方キロの
中に5つというのは尋常ではありません。こう
いう密集性には一つ単純明快な事実が反映して
いると思います。それは古代から黒川一帯には
多くの人々が生活し、神社を支えていたという
一点です。この一点だけ指摘しておいて先に進
みましょう。

前回記したように、織物関係神社と目される
式内社は黒川周辺に3社存在しています。綿
神社、多奈波太神社及び羊神社わた
じんじや たなばたじんじや ひつじじんじやがその3社で
す。それ以外に黒川周辺に別小江神社と片山
神社わけおえじんじや かたやま
じんじやの2社が鎮座し、合わせると黒川周辺に5
社もの式内社が存在しているわけです。ひしめ
きあうこの5社をひっくるめて全体として考え
ると、そこには何らかの状況が反映しているの
かも知れません。が、当面は織物関係神社3社
に注目することとしましょう。

5 多奈波太神社

まずは多奈波太神社からいきましょう。

多奈波太神社は延喜式神名帳に「山田郡多奈
波太神社」と記されています。名古屋市北区金
城4丁目に鎮座していて、いわば至便の地に位
置しています。訪ねる人のために簡単に位置を

*1『旧唐書』倭国伝：「表仁綏遠の才なく王子と礼を争い朝命を宣(のべ)ず

略述しておきましょう。

愛知県庁や名古屋市役所が立ち並ぶ官庁街のすぐそばに名古屋城が聳えています。城の北側には名城公園が設けられています。その名城公園のすぐ北側を黒川（堀川）が流れています。城北橋を渡って右（東）へ200メートルほど、徒歩でも数分で多奈波太神社に到着します。地下鉄名城線の「名城公園」駅で降りて5分もみておけば十分でしょう。

神社に到着すると社頭に名古屋市教育委員会名の掲示が出ています。全文を書き取ってあるのでその全文を以下に紹介しておきましょう。

たなばた
多奈波太神社

平安時代に編纂された「延喜式」に「山田郡多奈波太神社」と記される格式の高い神社で、主祭神は、あめの たなばた ひめのみこと天之多奈波太姫 命（天之棚機姫命）である。

おわりめいしよす え「尾張名所図会」にも、「たばた田幡村にあり、七夏の森といひて、例祭七月七日、ともしび燈を掲げて諸人さんけい参詣す」とある。昔からの祭礼風景が七夕祭りとして現在も続いている。

社殿は昭和二十年五月の空襲で焼失、昭和三十一年に現在の木造銅板葺きに復興再建された。

名古屋市教育委員会

当社にまつわる情報はほぼこの掲示に尽きている、とあってよいでしょう。掲示には創建年代等を示す由緒の部分がありません。由緒は不詳とされているので不記載も致し方ないでしょう。この掲示にない情報で主たるものは「戦国時代、織田信長の焼き打ちにあつて焼失した」という事実くらいなものです。

さて、当社の主祭神は、前記掲示にあるように天之多奈波太姫命ですが、この神は解説するまでもなく、中国伝来とされる織女、すなわち機織の女神です。この女神の他に、天照皇大神、応神天皇、大山津見命、大己貴命、素盞鳴神が祭神として名を連ねています。

が、多奈波太神社という神社名から容易に推察されるように、創建当時の祭神は天之多奈波太姫命すなわち機織の女神ただ一神だったに相違ありません。主祭神に加えて天照皇大神、応神天皇等々いくつもの祭神が加わっていく例は珍しいことではありません。

ここで是非とも押さえておかなければならないのは当社は江戸時代に「八幡社」と称していたという事実です。鎌倉時代以降武家社会の定着に伴って応神信仰が広まり、至る所に「八幡社」が創建されました。なので多奈波太神社も八幡本家から勧請を受けて「八幡社」と自称するようになったと理解すればよいでしょう。



前掲掲示にあるように、おわりめいしよす え尾張名所図会には「多奈波太神社は田幡村にあり。」という説明が付されています。このことから郷土史家の一部には「たばた たなばた田幡は多奈波太がつまったもので、両者は関係があるのではないか。」と説く論者がいます。どうやら、地名が社名になった、といたいらしいのですが、無理ないし強引なこじつけとしか私には思われません。そもそも、「たなばた」がつまって「たばた」になったというなら、「たなばた」が先でなければならなく、完全に自己矛盾になってしまいます。こうした説が登場するのも、ひとえに由緒不詳からきているのですが、大事なことはただひとつ。延喜式神名帳に「山田郡多奈波太神社」と記されてい

る、その一点です。

そしてその祭神は天之多奈波太姫命なのです。この事実をしっかり受け止めなければなにごとも進みません。

このことは、1100年以上前から天之多奈波太姫命を祭神とする多奈波太神社が存在していたことを厳然ともものがたっているのです。このことを確認しておいて今回の了としましう。

1 月例会報告

○ 法隆寺移築元の検証

名古屋市 佐藤章司

法隆寺は筑紫にあった法興寺を解体し、天智天皇9年(670年)全焼した斑鳩寺の跡地に移築し、法隆寺と名を改めた。この筑紫の法興寺の解体跡地に、観世音寺を造営した。九州滅亡後の事である。

法隆寺移築論は概略を述べると法興28年(618年)に完成した観世音寺の塔の心柱の礎石の大きさ・地下面の深さは現在の法隆寺五重塔の心柱と一致する、とする1991年に発行された米田良三氏著『法隆寺は移築された』によって発表された。ただ、この説には次の欠点がある。

『続日本紀』和銅2年(709年)には、未だ完成されず、完成を急ぐように督促されている。この事を取り上げられ、法興28年には完成していない、と批判されている。(古賀達也著「法隆寺移築論の史料批判—観世音寺移築説の限界—」、『古田史学会報』no49、2002.4.1)

今回、米田説の「観世音寺を移築して法隆寺とした」に対して米田説には間違いがあり、法興28年(618年)頃に完成した法興寺を大和の斑鳩寺の跡地に移築して法隆寺とした。と発表した。

この説の要点は従来の日本の建築法は堀立柱、平屋建て茅(草)葺であるが、寺院建築は礎石基壇の上に木造複数階(五重塔等)、屋根・庇は瓦葺きで、重量のある建築を支えられる

構造上の違いがあり、これを実現するには倭人の堀立柱の技術では無理で、仏教建築の専門家が必須であり、この技術者集団は百済国から来倭している。

『日本書紀』崇峻天皇元年(588年)に

- ・寺工太良未太・文賈古子
- ・鑪盤博士将徳白味淳
- ・瓦博士麻奈文奴・陽貴文等
- ・画工白加

らが百済国から来倭しているが、百済国対倭国の外交・交渉の倭国は九州王朝を指し、筑紫に来ているのであって、大和ではない。という認識が重要である。

この百済の技術者集団が推古元年(593年)1月15日に仏舎利を法興寺仏塔の心礎の中に安置し、16日、塔の心持を建てた。

又、この年(593年)始めて四天王寺を難波の荒陵に造り始めた。と『日本書紀』に記述する法興寺、四天王寺の造営記事は共に筑紫の九州王朝の寺院である。

中国⇒百済⇒筑紫が本来の仏教伝来のルートである。敏達天皇13年(584年)蘇我馬子は四方に修行者を探させて播磨国に高麗人の還俗した僧、惠便を仏法の師としたと記述されている。これは筑紫⇒播磨⇒大和への伝播であり、大和は仏教の先進地帯ではなかった。と説明した。

○ 非時香菓

名古屋市 石田敬一

『日本書紀』に、常世の國は、「絶域」すなわち遠く離れた土地に往って、「万里の浪」を踏破し、さらに「弱水」を渡るところにあると記述される。中国史料によると「弱水」は崑崙山の麓の周りを流れている「溺れる水」である。また、常世の國は、不老不死で神通力をもつ仙人が住む神仙の秘境「神仙の秘区」と記述され「俗の至る所に非ず。」とされる。したがって、常世の國は、神仙思想にたって、崑崙山をイメージして記述されている。

そして、崑崙山には「不死樹」があり、その甘木の(実)を食べると不老になるとされることから、書紀編者は、この甘木を柑木、すなわち柑橘類の木という認識を持って、

^{ときじくのかぐのみ}
「非時香菓」を「今橘と謂うは是なり。」のよ
うに記述したと示した。

○ 常世の長鳴鳥

名古屋市 石田敬一

遺伝子研究や考古学の成果と『史記』や『三
國志』韓伝の記事から、常世の長鳴鳥は朝鮮半
島で飼育された鶏と考えられるが、常世の所在
を決めるには資料不足とした。

○ 繊維街の源流を求めて（その1）

名古屋市 加藤勝美

「繊維街の源流」を連載していく予告を行いま
した。目前に手がかりとして

式内社が存在するので、その観点から源流を
探ることにしたと説明。ただし、第一回は内容
に踏み込んでいなく、いわば前文に相当する旨
を告げた。

○ 鉄の古代史

知多郡阿久比町 竹内 強

日本における製鉄の開始が、定説では古墳時
代に入ってからとなっている。

しかし、鉄製品は弥生時代早期遺跡からも発
見されている。倭人は千数百年も鉄の存在を知
りながらその作り方を知らなかったのだろうか？
弥生の人達はすでに青銅器の溶解技術を持っ
ていた。これには1200～1300℃の
温度を必要とした。

弥生時代の鉄製品の出土は圧倒的に北部九州
で占められている。中でも筑紫がその中心で、
次に多いのは熊本の阿蘇山周辺である。筑紫は
朝鮮半島、中国からの窓口であるからと説明さ
れている。では、阿蘇はなぜ多いのか？ 鉄製
品の大量に出土する阿蘇宮山遺跡(2～3世紀)
についての案内パンフレット『宮山遺跡通信』
No8に次のような記事がある。

「阿蘇は、当時における最大のベンガラ輸出国
だったのかもしれませんが。おそらくベンガラ輸
出の利益として大量の鉄製品を手に入れること
ができたのでしょう。」

ベンガラを1100℃程に熱すれば鉄ができ
る。この事実を考えれば阿蘇での鉄生産は容易
に理解できるのではないかと報告した。

2 月 例 会 予 定

日 時：2月9日（日）午後1時30分～5時

場 所：名古屋市市政資料館（第1集会室）

名古屋市東区白壁1丁目3番地

Tel:052-953-0051

参加料：500円（会員無料）

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分等

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下
駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の
東、有料(40分200円)

今 後 の 予 定

3月例会：3月16日（日）名古屋市市政資料館

4月例会：4月20日（日）

例会は、3・4月共**第3日曜日**です。

また、3月は「**黄當時講演会**」を開催します。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。
資料を配付される場合は、「**20部**」ご用意願います。

黄 當 時 講 演 会

本会会員である黄 當時氏(仏教大学教授)
の講演会を行います。

1日時：25年3月16日（日）

午後1時30分

2場所：名古屋市市政資料館

3演題：金印「漢委奴国王」の読みと意味

※講演会は3月例会として行います。